『惚れたモン』

登場人物

古賀秋人（２８）　会社員

南野楓花（２７）　秋人の取引先の営業

従業員　ローブウェイの従業員

「惚れたモン」あらすじ

南野楓花（２７）と休日に山登りデートのために、共にロープウェイに乗り込んだ古賀秋人（２８）。秋人と楓花は、ぎこちない雰囲気のまま頂上までの１５分間をスタートする。徐々に力が抜けた頃、楓花が自社の新製品「惚れたモン」の試作品を秋人に食べてもらう。頂上付近にゴンドラが近づくころ、二人はいい雰囲気になり、秋人の腹と心がいっぱいになる。安全確認のためにゴンドラが急停止し、楓花が秋人の下の名前を呼んだことによって、秋人の恋心が加速し始める。秋人は、楓花に下の名前を呼ばせてくれとお願いする。楓花は、「惚れたモン」を秋人の会社の力で全国区のお菓子にすることを条件に出す。秋人は驚きつつも、検討することを約束する。楓花は一仕事を終えたように、秋人を置いて下山する。一方、秋人は、山の景色をぼーっと見ながら、会社の上司に電話をかける。

ロープウェイが登っていく音。

秋人「いやあ、まさか一緒に行ってくれるなんて。ありがとうございます」

楓花「いやいや、私も休日にこうやって古賀さんと一緒に過ごせるなんて嬉しいです」

秋人「いやあ、照れちゃうな」

楓花「山登り初心者の私がいけるのかなと思ってたんですけど」

秋人「はい」

楓花「ロープウェイだったら、15分で山頂まで行けるし心配ないですね」

秋人「そうですね。僕も山なんて登らないんで」

楓花「えー、そうだったんですね」

秋人「お恥ずかしながら」

楓花「集合場所にいかにも登山する！　って恰好の人がいて、よく見たら古賀さんで。ふふふ。てっきりその道の人かと」

秋人「ははは、実は、できる男と思われたくて、昨日買い揃えたんです」

楓花「そうだったんですか。古賀さんはいつでもできる男に見えますよ」

秋人「そんな、そんなことは」

楓花「ほら、古賀さん、いつも腕まくりしてるじゃないですか」

秋人「腕まくり？」

楓花「今だってしてるじゃないですか。そういうとこ、できる男っぽいなあって」

秋人「あは、えへ、そうですか？　そうかあ、えへへ」

楓花「そうですよ、自信持ってください！わー！　海、綺麗ですねぇ！」

秋人「そうですね。あ、あそこ南野さんの会社の工場じゃないですか？」

楓花「あ、そうなんです！　最近建ったばかりなのによくわかりましたね」

秋人「もちろんですよ。取引先ですから。そこはしっかりと」

楓花「さすがです！　ふふふ、これからもよろしくお願いいたします」

秋人「いえいえ、こちらこそ」

楓花「あ、古賀さんの会社、あそこの辺りですよね」

秋人「どこですか」

楓花「あそこです」

秋人「あ、たぶん、その辺だと思います」

楓花「もう、自分の会社ですよ」

秋人「いやあ、なんかごめんなさい」

楓花「あ、ごめんなさい」

秋人「え？」

楓花「あ、私たち、休日なのに仕事のことばっかりで」

秋人「あー」

楓花「そうだ。しりとりしませんか？」

秋人「え？　ああ、しましょう、しましょう。しりとり」

楓花「じゃあ、りんご」

秋人「ごりら」

楓花「らっぱ」

秋人「ぱ、ぱん、パン」

楓花「あ」

秋人「あ」

楓花「終わっちゃいましたね」

秋人「ごめんなさい。パンツって言おうと

して、パンツはダメだろうと思って」

楓花「ふふ、もう一回行きましょう」

秋人「ありがとうございます」

楓花「パンツ」

秋人「つ、つみき」

楓花「キツネ」

秋人「ネコ」

楓花「コスメ」

秋人「召し上がれ」

楓花「め、召し上がれ？　ふふふふ」

秋人「あ、ダメですよね。動詞」

楓花「あ、もしかしてお腹空いてます？」

秋人「いえ、そんな」

楓花「本当は頂上で食べようと思ってたん

ですけど」

楓花、リュックのファスナーを開け、ガサゴソとビニール袋を取り出す。

秋人「それは？」

楓花「うちの新商品です。まだ試作段階なんですけど、試作品を大量に作りすぎちゃったみたいで、社員たちでいくつか分けたんです。ほら、もったいないですし」

秋人「そうですよね、もったいないですもんね」

楓花「あの、もしよかったら、ご感想をいただけたらなって」

秋人「ぜひ、喜んで」

楓花「ありがとうございます」

秋人「では、いただきます」

楓花「どうぞ」

秋人「（食べながら）ん、おいしい！」

楓花「わあ、嬉しいです。実は、これ熊本

の地下天然水を使ってるんです」

秋人「（食べながら）ほへえ」

楓花「熊本の水道水って、蛇口をひねれば

ミネラルウォーターって言われていて」

秋人「それ知ってます！」

楓花「本当ですか！」

秋人「僕、実家が熊本なんです」

楓花「えー！　早く言ってくださいよ！

わあ、私、すごい失礼な、失礼でしたよ

ね？　熊本の方にこんなペラペラと」

秋人「いえいえ、失礼だなんて。確かに熊

本市役所とか熊本駅の水飲み場に書い

てあるなって」

楓花「なんかすみません」

秋人「いえいえ。おいしかったです」

楓花「あ、実は試作品２もあるんですけど、

食べてみませんか？」

秋人「え、いいんですか？」

楓花「どうぞどうぞ。私の家にたくさんあ

るんで、お気になさらず」

秋人「では、いただきます」

楓花「召し上がれ」

秋人「わ、おいしい。もしかして、これ」

楓花「はい」

秋人「不知火？　ですか？」

楓花「そうです！　最初に食べてもらったのは、カスタードなんですけど、こっちは不知火ソース。よかったら、試作品3もあるんで食べてみてください」

秋人「3もあるんですか？」

楓花「はい！　是非食べてみてください」

秋人「あ、はい」

楓花「どうぞ」

秋人「（食べながら）あ、こっちは、ブルーベリー？　ですか？」

楓花「そうです！　阿蘇のブルーベリー」

秋人「へえ、でも、熊本の会社じゃないのに熊本を扱うんですね」

楓花「あ、そうなんです。今回は、私の企画でして」

秋人「ああ、そうだったんですね」

楓花「私、一年前、熊本に出張に行ったんですよ。そのときの気持ちが忘れられなくて」

秋人「どんな気持ちですか」

楓花「あの、ほんわかした気持ちといいますか。なんだか、故郷だって思ったんですよね。いずれは住みたいなぁとか思って」

秋人「へえ、僕も帰ろうかなぁ」

楓花「え？」

秋人「いや、こっちの話です」

楓花「びっくりしました、ふふふ」

秋人「ふふ。でも、南野さんが僕の地元に興味を持ってくれるなんて嬉しいです」

楓花「そんな」

秋人「本当ですよ！　本当」

楓花「あはは、疑ってないですよ」

秋人「そうですよね。あはははは、えへへ」

ゴンドラがガコンと止まる音。

楓花「きゃっ」

秋人「大丈夫ですか」

楓花「はい」

秋人「止まっちゃいましたね」

楓花「高所恐怖症な人は怖いでしょうね」

秋人「高いところは大丈夫ですか？」

楓花「はい。秋人さんもいるんで。あ」

秋人「あ、全然、大丈夫ですよ」

楓花「いえいえ、まだそんな関係じゃないですし」

秋人「まだ？」

楓花「あ、いえ」

アナウンスが聞こえる。

従業員「ただいま安全確認のため、一時停止しております。まもなく運行を再開いたします。席を立たずにその場でお待ち

ください」

秋人「よかった。誰も死んでなくて」

楓花「あの」

秋人「なんですか？」

楓花「秋人さんって呼んでもいいですか？」

秋人「え？」

楓花「熊本でお世話になるかもしれないですし」

秋人「え？」

楓花「あ、深い意味じゃなくて」

秋人「深い意味じゃ、ないですか」

ゴンドラが動き始める。

楓花「あ、動いた」

秋人「お、動きましたね」

楓花「よかったですね」

秋人「よかったです」

楓花「あ、あれ、頂上の駅じゃないですか？」

秋人「あ、本当だ。」

楓花「ふふふ、なんだか早かったですね」
秋人「ね。あ、これおいしかったです」
楓花「よかった。もしよかったら、これ、どうぞ」
秋人「箱？　ですか？」
楓花「試作品の詰め合わせで。おいしいって言ってくださったんで」
秋人「あ、ありがとうございます」
楓花「あ、もしよかったら、秋人さんの会社の皆さんで食べてください」
秋人「あ、秋人さん、ふふ」
楓花「どうしました？」
秋人「あの」
楓花「はい。なんでしょう」
秋人「ぼ、僕も」
秋人「楓花さんって呼ばせていただいてもよろしいでしょうか」
楓花「あー」
秋人「ダメ、ですよね？　すみません。なんか僕だけ舞い上がっちゃって」

楓花「いえ、ちょっと驚いちゃっただけで」
秋人「あはは、そうですよね、はは」
楓花「いいですよ」
秋人「え？」
楓花「楓花って呼んでくださってもー」
秋人「え！　本当ですか」
楓花「はい」
秋人「わ、嬉しい！　ありがとうございます！　ふ、ふ、楓」
楓花「ただし」
秋人「え？」
楓花「ただし、秋人さんの会社の力でこの惚れたモンを熊本一の、いや全国一のご当地お菓子にしてください。これが条件です」
秋人「惚れたモン？　え？　どういうこと？」
楓花「さっき食べていただいたものの商品名です。惚れたもん負けってことです」
秋人「え？」

楓花「名前の意味です。惚れたらずっと好きでいてしまうようなお菓子という」

秋人「あ、ああ」

楓花「ご検討いただけますか？」

秋人「あ、ええ。検討させていただきます」

楓花「嬉しい！　ありがとうございます」

秋人「でも、楓花さん」

楓花「まだ、呼んじゃダメです」

秋人「いや、でも、南野さん」

楓花「なんでしょう」

秋人「検討しますけど、なぜうちの会社に来た時に言ってくれなかったんですか」

楓花「それは」

秋人「はい」

楓花「私が勤めている会社の商品じゃないからです」

秋人「え？　さっきうちの商品ですって」

楓花「実家のです」

秋人「実家？」

楓花「熊本です」

秋人「え？　どういうこと？」

楓花「ずっと嘘ついていてごめんなさい！」

秋人「嘘？　どこからどこまでが嘘？」

楓花「割と前半から」

秋人「ええ！　じゃあ、会社に営業をしに来たのも、嘘？」

楓花「違います、違います！　それは、本当です」

秋人「あ、本当か。僕はどうしたら」

楓花「あの検討していただければ」

秋人「あ、わかった。それは検討します」

ゴンドラのドアが開く。

従業員「ありがとうございましたー。お足元、気を付けてくださいねー」

秋人「え、あ、はい。すみません。今降ります」

ゴンドラから降りる秋人の足音。

従業員「お客様」

楓花「あ、私、このまま下山します」

秋人「え、どういうこと？」

従業員「かしこまりました。下で追加料金をお支払いください」

楓花「ありがとうございます」

秋人「え、ちょっと」

楓花「ご検討、お願いしまーす！」

秋人「ちょっと、待って」

ゴンドラの扉が閉まる音。

楓花「ふう」

電話の呼び出し音。

楓花「あ、おかあさん？　惚れたモンば食べてくれたばい。うまかー、うまかー言うて！　うん、大手広告会社ばってん、うまくやってくれるたい！　うん、うん、

ならねー！」

風が吹く。

楓花「ばっ！　風じゃ。うったまがったー」

そよ風が吹き、鳥の声が聞こえる。

電話の呼び出し音。

秋人「あ、もしもし。休日にすみません。見込みのある新商品が出るみたいで、あ、はい。とてもおいしいんです。あ、そうですよね。はい。では、月曜日の会議で。はい、失礼します」

電話が切れる音。

風が吹く。

秋人「可愛かったなあ」

〈終〉